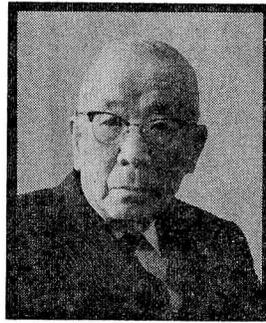


洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

阿部清先生 追悼号



京都大学名誉教授 阿部 清先生には去る五月二十四日午後七時三十分、享年八十六才で逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

なおご葬儀は五月三十日、左京区東天王町 東本願寺岡崎別院で行なわれました。左記に先生の御略歴を記し、偉大な先生の御足績を偲ぶ縁といたしたく存じます。

阿部 清先生略歴

明治25年6月1日 徳島市蔵本元町にて誕生

- 明治44年5月 徳島県立徳島中学校卒業
- 大正4年7月 第六高等学校卒業
- 大正7年7月13日 京都帝国大学工科大学電気工学科卒業
- 大正7年8月25日 財団法人青柳研究所技師
- 大正15年12月21日 京都帝国大学工学部講師
- 昭和5年1月31日 青柳研究所解職
- 昭和5年4月11日 京都帝国大学助教(工学部勤務)
- 昭和7年3月31日 電気工学第五講座分担
- 昭和9年2月22日 電気工学第一講座分担
- 昭和10年7月11日 工学博士
- 昭和12年4月28日 名古屋汎太平洋洋平和博覧会審査官嘱託(商工省)
- 昭和12年11月28日 欧米各国へ出張
- 昭和14年4月10日 張

- 昭和15年5月30日 京都帝国大学教授(工学部勤務 電気工学第四講座担任)
- 昭和17年4月1日 京都帝国大学工学研究所嘱託
- 昭和17年9月27日 満洲国及び中国 10月26日 華民国へ出張
- 昭和18年3月31日 京都帝国大学化学研究所員兼務
- 昭和19年2月28日 学術研究会議第28、第29、第67研究班員
- 昭和20年3月31日 航空電気学第二講座分担
- 昭和20年12月1日 京都帝国大学職員厚生会協議員兼務
- 昭和21年5月 照明学会関西支部長
- 昭和21年10月31日 電力委員会委員
- 昭和21年11月11日 京都大学技術課長兼務
- 昭和22年3月31日 電気学会関西支部長
- 昭和23年4月 電気学会関西支部長
- 昭和24年3月 支部長
- 昭和27年5月10日 電気学会第一回浅野奨学賞受賞
- 昭和27年11月30日 京都大学評議院審査会審議員
- 昭和29年4月1日 電気工学第四講座より電子工学第二講座に所属換え
- 昭和29年4月18日 藍綬褒章受賞
- 昭和30年6月1日 京都大学停年

- 退官
- 昭和30年6月2日 同志社大学工学部教授
- 昭和30年6月8日 京都大学名誉教授
- 昭和31年4月1日 同志社大学工学部部長
- 昭和32年3月31日 学部長
- 昭和31年4月20日 日本放送協会
- 昭和35年7月22日 経営委員会委員
- 昭和35年5月14日 電気通信学会功績賞受賞
- 昭和37年6月30日 同志社大学工学部教授退官
- 昭和37年7月1日 同志社大学工学部非常勤講師
- 昭和38年5月10日 社団法人日本材料学会名誉会員
- 昭和40年5月15日 電気通信学会名誉会員
- 昭和42年3月22日 放送文化章受賞
- 昭和43年2月3日 勲三等旭日章
- 昭和54年5月24日 逝去従三位に昇叙

阿部清先生を悼む

洛友会会長 松田 長三郎

本学名誉教授、本会顧問阿部清先生には、去る五月二十四日、87才の天寿を全うされて長逝されました。誠に哀惜痛恨の極みであります。嚮きには鳥養・林(重)・大久保の諸先生を喪ない、今又ここにこの不幸に遭いますことは、最も悲しいことであります。

先生のご業績については、別項で川端教授が詳記されますが、大正7年、京都大学電気工学科をご卒業以来、青柳研究所を経て、京都大学に、更に定年ご退官後は、同志社大学において前後、実に60有余年の長きに亘り、研究と教育に献身せられ、この間、初期のご研究として、タンクステン織糸・真空計・半真空電球を初めとする多数の研究を達成せられ、殊には、夙に電気材料の重要性を認識せられて、その研究及び啓発に尽力せられて、斯学今日の盛況を見るに至りました先見の明には、感銘に堪えない所でありまして、電気学会賞等受賞の榮譽を荷っておられます。又日本放送協会の経営委員として、その重責を果されるなど、常に学界・業界に重きをなされ、指導的責務を果して来られましたし、多数の卒業生を養成され、その温厚篤実な性格は、敬愛の的でありました。今や再び先生の温容に接することができなくなりましては悲しい極みであり

ります。今、ご生前中のあれを思い、これを偲べば、哀悼の情愴々切なるを覚えます。茲に本会に賜りましたご高恩に対し、卒業生

阿部清先生のご遺徳を偲ぶ

葬儀委員長 川端 昭

京都大学名誉教授 勲三等従四位旭日中綬賞 阿部 清先生は去る五月二十四日午後七時三十分、御齡八十六才をもつて御逝去されました。謹んでご先生の御冥福をお祈り申し上げます。

阿部先生は明治二十五年六月一日徳島市にお生まれになり、第六高等学校を経て大正七年京都帝国大学工学部電気工学科を卒業になり、直ちに財団法人青柳研究所の技師となられ、主としてタンングステンの製造と電球の改良について研究されました。大正十五年十二月に京都帝国大学講師として電気工学教室に勤務されることとなり、昭和五年四月に助教に昇任されました。昭和十二年十一月より約一ヶ年半、欧米各国出張を命ぜられ、主としてマサチューセツツ大学のフォン ヒッベル教授の下で研鑽をつまれ、昭和十四年四月に帰国されました。翌十五年三月教授に任ぜられ、故本野先生の後継者として電気工学第四講座(後に電子工学科の電子計測工学

一同に代り、謹しみて感謝敬仰の誠を捧げ、先生のご冥福とご遺族様の御清福をお祈り申し上げます。

講座)をご担任になり、電気材料および電気磁気計測を中心に教育と研究に献身され、昭和三十年六月停年退官されました。

さて、先生のご研究は多方面にわたり、その全てを尽すことには不可能であります。そのあらましをご紹介します。先生の御偉業を偲ぶすがと致したいと存じます。

戦前においては光源および光源用材料、可熔片などの遮断器材料および各種の電気応用計測の研究を遂行され、特に高周波焼入法については独創的な発明と実施の功績により藍綬褒賞授与(昭和二十九年四月)の榮譽を荷われました。

戦後にはセレンニウムトランジスタの研究があります。セレンニウム整流体に第三電極を設けて制御作用をさせる試みで、種々の構造について実験的研究を進められましたが、その増巾作用を確認されたのは惜しくもゲルマニウムトランジスタ発明の翌年(昭和二十九年)のことでした。

この業績はわが国における固体エレクトロニクスの先駆的研究といふことができましよう。

また、強誘電体材料としてチタン酸バリウムが発見されるや、いち早くこの材料の将来性に着目され、その開発と工学的応用の研究に着手され、諸外国に先がけてその圧電的応用の研究を開拓し、超音波変成器や圧電音叉、フィルムタなどについて先駆的成果をあげてわが国の強誘電体応用の発展の基礎を確立されました。水中超音波変成器の分野では、従来水晶のような圧電材料がニッケルやアルフエロ(鉄合金)のようなものしか利用できるものがありませんでしたが、先生の開発された新しい強誘電体磁器の変成器は性能が極めて優秀で、水中音響の分野に新生命を開拓されたもので、その業績は広く内外に知られ、わが国の電子技術の発展に大きい役割を果たされたのであります。これらの業績により先生は電気学会より第一回の浅野奨学賞を受賞(昭和二十七年五月)されました。

また、有機珪素化合物は今日では広く実用されている重要な材料ですが、先生はその初期においてこの材料の重要性を認め、その物性についてあらゆる角度から研究され、耐熱絶縁材料としてのシリコーン樹脂の今日の発展の基礎を確立されました。これらの他、螢光灯の冷陰極電極として従来用いられていた金属材料に代る半導体材料(酸化チタン半導体)を導入され、その性能を著しく改善されるなど、研究活動は広い分野にわたり、これら一連の研究成果に対して電気通信学会から功績賞が贈呈(昭和三十五年五月)されました。

以上述べましたように先生は物理学および化学における新事実と新物質に深い注意を払われ、常に広い視野に立つて内外の知識を結合し、これに独創的な知見を加えて未知の分野を開拓し、さらに多岐にわたる応用を創案されたのであります。

先生は単に研究教育の面のみでなく、かねてから電気材料研究の重要性を唱えられ、昭和十八年には京都大学化学研究所に電気材料部門を創設してこの方面の育成をはかり、また昭和二十九年には他大学に先がけて電子工学科の新設に尽力され、本日の基礎を確立されました。また一方では、京都大学技術課長を兼務され、学内における拡充整備に貢献され、京都大学評議員、大学院審査会審議員として学内行政にもご功績があったのみならず、学外においても日本放送協会経営委員会委員となり、放送技術の改善、放送事業の発展

ならびに電気通信界の隆盛に尽されたご功績もまた誠に大きいものがあり、これに対して放送文化賞を受賞(昭和四十二年三月)されました。

また照明学会、電気学会ならびに電気通信学会などの各種学術団体や委員会などの各種要職を歴任され、学会ならびに業界の発展のために尽されました。

先生は以上のような数々の輝かしいご業績を残され、京都大学を停年退官された後も、同志社大学教授、同工学部長、応用科学研究所理事としてご活躍になりました。

公職を離れられた晩年においても、なお外国文献をひもかれ、学者の道を究められる御姿にはただただ敬服と敬愛の念を禁じ得ないものがありました。去る五月二十四日午後七時三十分、老人性肺炎のため永遠の眠りにつかれました。生死は人の世の常とは言え、先生を喪ったことは痛恨の極みであります。ここに重ねて先生のご冥福を祈りつつ筆を擱きます。



阿部君を憶ふ

大正7年卒 間崎 竜夫

阿部君が逝いた、との電話があったのは、これも同級生の、楠本宗次郎君の追悼文の依頼が、日立の関係者からあった直後であった。丁度その時は私の古巣ともいふべき、長崎三菱造船所の旧友の招待で長崎へ出発する前日のことで私は呆然自失、言ふべき言葉もない状態となった。

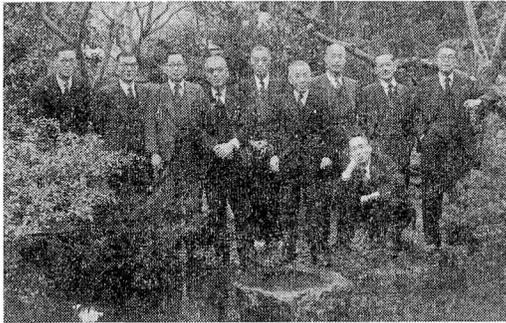
取るものも取り敢えず、阿部邸に行く。明日密葬と云ふので、葬儀屋が入って大混雑であったが、未亡人は気が張って居られたため、意外に落ち付いて色々とお指図をして、居られたが、私を見て、肺炎併発などの御臨終の模様など、お話し下さった。

そして納棺をすませたばかりの棺の窓を開けて私に最後のお別れをさして下さった。私の阿部君生前、最後に逢ったのは、故鳥養先生追悼会で、阿部君が嗚咽しながら、先生の徳を偲んだ話しをせられた時で、あの時の顔を思い出した、息のつまる思いがした。

私は、電気教室の三年間、阿部君と共に学んだ。学生時代の君は、寧ろ、実直、真摯、何でも人の言う事は「ソーダ、ソーダ」と賛成する人物であった。教壇に立

たれて後は果たして、どうであったか知らぬが何でも「ソーダソーダ」と賛成されるので、当時政府には、参政官と云う官職があったので、吾々仲間では、阿部君のことを、阿部賛成官と云う愛称で呼んで居た、それ程、お人好しで通って居たのである。

大正七年卒業には、君は青柳研



写真

大正七年卒同窓会
日本電池今出川寮

昭和21年

中央前列に阿部、加藤の両君
内生存者、後列、小杉、宮崎、
山西、間崎のみ、死亡者、阿部、
加藤、長谷川、工藤、岡添

究所、後に母校電気教室に教鞭を取られ、私は三菱長崎造船所(三菱電機分離独立前)に入社して暫く交遊の機会は無かったが、終戦後、私は日本電池会社に京都で常務として勤務する様になって再び交遊は再開した。日本電池寮でも属々同級会を開いて阿部君もよく出席して下さった。近年になって大正七年と大正六年卒業の松田長

阿部 清先生を偲ぶ

応用科学研究所理事長
昭和6年卒 吉田 洪 二

応用科学研究所は先生によって研究の種が播かれましたが今は立派な樹木に育ちました。

先生の研究についての御生涯はずっと研究所と関係の深いものでありました。先生は大正7年京都大学を御卒業されるや研究所の前身でありまして当時は大学の構内にありました青柳研究所の技師に御就任、以後研究所が応用科学研究所と改称になりましたよりも引き続き故鳥養理事長先生の御信望に答えられ、研究所員一同の敬慕を受けて一途研究所のためお尽し下さいました。先生が青柳研究所時代になされた御仕事は数多くありますがその代表的なものを挙げますと、低圧ガスを封入しました電球所謂半真空電球の研究、ゲッター

三郎君の組との合同同窓会「信友会」となつてからは毎月機関誌を発行し、時々会合を開いた。阿部君も鳥羽志摩への一泊旅行。大枝への柿喰い会等には幹事として、よくお世話をして下さった。思出は多いが、ここには、終戦後の思出の写真二、三を御披露して阿部君を偲ぶこととする。

周波焼入の技術を開拓されたのであります。その御功績により昭和29年には藍綬褒賞を受けられました。

電気材料関係の研究ではセルニウムトランジスタの発明があります。その他電子ビームによるシリコンの加熱法、グロー放電による絶縁膜の製法等何れも獨創性に富んだ研究でありました。

お元氣でありましたときは毎週一回行われます研究会議には御出席になり御指導をいただきました。最近では御体の加減から時折り研究所に來られ研究の発展の状況について御報告をお聞き下され、御意見を伺うことが出来ました。只今ではもうそのお姿に接することも出来なくなりましたが、我々は先生はきっと同じように研究を見守っていて下さると信じております。いまは只先生の御冥福をお祈り申し上げます。

阿部先生を偲ぶ

日新電機会長
昭和11年卒 大森 武 司

私の学生時代は阿部先生の助教の時で、優しい中にも厳しい先生として、御薫陶を受けたばかりでなく、個人的にも、妻の亡父(物理の教授)の御友人であられた関係上、格別に心を掛けて頂きたい思い出である。

又、日新電機には、地元の電機メーカーとして、又多数の教子も居た関係で、昭和の初期以来、格別の御関心を寄せて頂き、常に愛情に満ちたお気持ちでお教えを頂いたり、他の教室の先生方に御紹介を頂くなど、本当に親身なお授けを頂いたことは、日新の諸先輩の感銘と感謝と共に語りつがれている所である。私が日新電機へ来たのは、昭和二十年からであるが、私ははじめ、日新の技術者を集めて、先端をゆく新技術について、頻繁に、御講話を頂いたが、内容の清新さといひ、黒板に書かれる躍動する様な数式といひ、何時もその迫力に打たれて、常に我々に新鮮な充実感を甦らせて頂いたものである。

ずあるなど、その御薫陶は、所謂文武の両面に亘り、その篤実にして峻厳な御人格に教えられた者は、日新の中の上下を問わず、誠に広範に及んでいる。

晩年病を得られてからも、幸いにして御回復の後は、日新に対する数十年に亘る愛着止み難きものがあると仰言って、御不自由を推して御来社を頂き、変らぬお教えを続けて頂いたことは、私共の終

生忘れ得ぬ所で、日新電機に対する先生の御感情と、日新電機の技術を育てて頂いた御恩は、我々一同後々まで、忘れてはならないものである。

先生を失って、文字通り慈父を失ったという気持が一入で、ただただ痛惜の極みである。

謹んで御冥福をお祈りするばかりである。

合掌

阿部清先生のご逝去を悼む

詔問電波工業専門学校長 卒 田中哲郎

私は約四十年間京大にお世話になり、阿部先生のお弟子として先生にご厄介をお掛けしたことが最も多かった一人です。先生といつかはお別れせねばならぬ日が来ると覚悟はしていたものの、いざ先生がお亡くなりになったいま、頼りにしていた心の柱がいかに大きかったのであったかを痛感しています。

先生の高潔で円満なお人柄は、接するすべての人々に敬慕の念を抱かせたようですが、先生の研究室に置いて頂き、直接ご指導にあつた私たちににとっては、先生の視野の広さ、鋭い洞察力、自由で独創的な考え方などについて、非常に教えられることが多かったと思います。

先生の学問研究に対する情熱は、停年でご退官になったあとも少しも衰えることなく、眼がご不自由になられても、ルーペを使って新しい書物や外国雑誌を読んでもおられるご様子は、全く頭の下ることで、私たち後進は鞭打たれる思いをしたものでした。

先生はまた知人や後輩との交わりを大切にされましたので、先生のもとには常に多くの人たちが、慈父を慕うように入替り立替り集って来ました。そして阿部先生のご薫陶を受けたものはみんな、お互いに家族のようになって互いに助け合い啓発し合つたことが思い起こされます。

私が京大を退官したあと、どこに勤めたらよいかと、私以上に先生が心配して下さっていたやうでしたが、停年を待たずに詔問電波高専に行く話もち上つたとき、先生は事情を聞いてご賛成下さいました。またこの四月末に先生の自宅に参上して、同高専の内情や私の初体験などを報告申し上げたときは、お疲れのところ一時間にわたって熱心に聞いて安心して頂いた様子でした。そのときはもうとても外出などは出来ないし仰しゃっておられたので、その数日後にご不自由なお身体で、奥様につきそわれて拙宅にお祝いに見えたとときは、私は全く驚いて恐縮して終つた次第でしたが、それが私のお見かけした最後の先生のお姿

阿部先生の思い出

高周波熱錬常務取締役 卒 土方利夫

先生がお亡くなりになつて約三週間後の六月十六日に、私の退官記念の講演会がもたれたのですが、私のような凡庸の徒を最後まで引立てて下さつた先生に対する感謝とごんげおよび哀悼の気持ちをこめて、お集りの皆様にお話をした次第でした。

私は不肖の弟子でしたが、先生の大らかさ、純粹さ、学問に対する情熱などは大いに学んできたつもりで、今後ともそのお教えを後進に伝えてゆくつもりです。

先生永い間有難うございました。どうか安らかに眠り下さいませ。

特に御定年後は殆ど毎水曜日に研究部に御来社頂き、新技術に関する貴重な御示唆を頂いたことは数え切れない。特にICの黎明期ともいへば早い時期に、極めて速い速度で、ICが真空管にとつて代ることの必然性を熱烈に説いて頂き、誠に貴重な御教導を頂いた事は、忘れられぬことの一つである。

又その間、単に技術的なお教えにとどまらず、人間として、礼節に欠けたり、分にふさわしくない言動などがあつたりすると、厳しい御叱正を頂いたことも一再なら

去る五月二十五日は丁度京都に出張し、午後応用科学研究所をお尋ねした処、昨夜阿部先生が急に亡られたと聞き、突然の事に仰天すると共に悔恨の念に打たれました。と云うのも、実は三月下旬機械の西原先生のお葬式が妙心寺であり、お焼香の列に並んで待つて居た時に、今にも倒れんばかりのお寺から出て来られ、どうした事かと心配してよく見るとその人が阿部先生でした。あんな体でよく

今度応研の山本先輩から先生の追悼文を書けとの御指示があり、私共の出る幕ではないと知りつつ、敢て追悼の気持を一言申し述べます。私は第二次大戦に突入した昭和十七年の九月に卒業、直ち

に海軍技術科士官として兵役に服し、終戦迄六ヶ年の内には貴重な実践の経験も得て幸い帰還出来ましたが、その間同期生は十名の尊い犠牲者を出して居ります。戦後鳥養先生にお願いして約二年間応研に席を得、高周波焼入技術を実用化すると云う事で高周波熱錬に入社、現在に至って居る者です。その間三十以上に亘り鳥養、阿部両先生を始め林重憲先生、西村(公金)、西原(機械)諸先生の先輩に御指導を受けられるという恵まれた立場に居り乍ら、ただただ無為に歳月を労費して了った事とはづかしく思うと共に、茲数年の間に長老をすべて失って、灯の消えた寂しさを味って居ます。次に阿部先生について二、三の思い出を申し上げます。

一、学生時代の阿部先生の印象は小軀乍ら赤ら顔でダブルの背広に身をかためた恰幅のいい先生で、やや頭に抜ける様な高い調子の声で活気のある講義で学生達に人気がありました。特に心に残っている事は開戦間近い頃、アメリカの電気工業と比較され、日本は材料面其の他アメリカより二十年は遅れて居る事を指摘され、言外に重大な事態になった事を強調された事です。

二、二回生の夏休みに約一ヶ月仲間と先生の実験のお手伝い(？)を

させて貰いましたか、多分金属塩をつかった電解型整流器の特性値を調べる実験で、電解液や電極がどんな化学変化を起して行くのやらよく解らず、データーが纏まらなかった事と、よく電磁オシロを断線させたメーター室のお世話になった事を覚えて居ます。又当時は各研究室に女性が多く、女ボス「お西さん」等と心安くなり山や川へ遊びに行ったりして、同室に居られた田中哲郎さんにニヤニヤされました。それでも終了の日阿部先生に校友会館で御馳走になり、有難いお小言を頂戴しました。「何ういう実験をやったか現象を理解せねば駄目だよ。」

阿部先生を偲んで

村田製作所常務取締役
昭和25年 卒 藤 島 啓

三、話は飛びますが応研では毎年高周波焼入に関する研究会が行われ、鳥養先生を始め長老の方々

が顔をそろえられ、御指導して頂き、一同相当に緊張したものですが、終了後酒が出ますと長老方はほとんど早くお帰りになり、唯一人阿部先生が御活躍されたものです。もともと晩年血圧が高くその為吐血されてからは非常に健康に御留意になり、腰が少々御不自由だけで御元氣そうでした。特に鳥養先生の追悼会にはどうしても出席して一言お礼を申し上げるのだと強い決意で、自宅から会場迄お伴しましたが、本当に決然と今迄の厚い御指導に対して感謝の言葉とお別れの辞を披露され、心の熱くなるのを禁じ得ませんでした。

先生の自宅に最後にお伺いしたのは四月三十日の夕方でした。日本の電気電子学会の最長老として京大御退官後も御自宅にて御勉学を続けておられた阿部先生に、若輩の私が度々気軽にお伺いするなどは全く失礼至極とは思いましたが、年々衰弱される体力と、先生の御清純な心から、ともしれば厭世的に、そして孤独に寂しく毎日

を過ぎる先生に、少しでも楽しいお話をして気を紛らしてあげたいとの切なる願いから、度々お伺いして近況報告と人間の可能性についての話をすることにしていました。その最後のお言葉が「今迄いろいろ云って来たが、わしももう動けなくなったので、あとはすべてお前らにまかせる。頑張ってくれ……」ということでした。

今迄先生にお逢いして、このような弱気のお言葉を聞いたことは一度もないのです。そして気になっていた五月二十四日夜、ついに悲しい知らせが参りました。

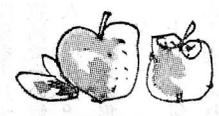
思えば私が在学中、阿部研の田中研究室に入って以来、主としてチタン酸バリウムについて先生との対話が始まりました。「革命は材料から起る。材料こそ近代技術の主流である。」と物性から製法応用迄、実に巾広い無限のアイデアの連続でした。その着想は現実の問題ばかりでなく、五年先、十年先の発展方向であり、理論を重視するとともに実際的なテクニクも取り上げる本当に工学的な態度で一貫しておられました。

先生は村田製作所にチタン酸バリウム半導体の研究を始めるよう勧められました。如何にして絶縁抵抗の高いチタンコンを作るかに専念して、半導体化されたチタバリなどは不良品として捨てていた時代に、もうこの材料の無限の発展を予見しておられました。この研究により僅か十年間に二百億円近い市場が出来たことは驚くばかりですが、それ以上に先日も「純度を上げる方法がある。それが出来ればチタバリでトランジスタが出来る……」と云われました。我々から見れば古典物理と真空管の時代に生きられた八十六才の先生が

どうして半導体の最先端の技術を身につけておられるのか全くの驚異でした。酔えば益々談論風発、専門の科学談義が加速し、視力衰えた晩年になるほど文献を読み、我々を指導された研究一筋の先生の御一生は、正に俗悪なものを捨てて神に近づく求道者のお姿でした。

五月三十日の先生の御出棺の際それ迄晴れていた空が急に曇り、暗黒の中にすさまじい雷雨となりました。読経も打消す雷鳴の中に私はふと大学で習ったパツシエンの法則の講義を思い出しました。それは暗黒の空を黒板として、白墨も折れん許りに力を入れて熱筆とともに丁寧に放電の理論図を書き上げてゆく在りし日の先生のお姿でした。先生の最後らしく余りに劇的な光景でした。

先生どうか心安らかに眠り下さい。



随想

会長 長松田長三郎

世界は、目まぐるしく変わって行きます。先般、ウィーンで開催された米ソ主脳会談で、SALT・IIが合意されたことは、一応結構なことであったが、これからは、その協定の範囲内で、両国とも、科学技術の精を集めて、益々その精鋭を誇る新兵器の開発に熱中するのではないかと危ぶまれます。こういうことが、エスカレートしたら、今後一体どういうことになるかと非常な不安に駆られます。

6月28・29の両日、東京で先帝国主脳会談(サミット東京会議)が開かれ、各国主脳が、一堂に会して協議されることは、我が国にとっては空前のことで、歴史的の国際的大会議であります。今や世界の中の日本の地位は、陰然たる地位を確保していますことは、慶ばしいことです。大平総理はこの会議に、劇的成果を期待されぬようにと、予防線を張っておられますが、何と云っても、エネルギー問題がこの会議の最重要議題であるようですが、時を同じくして、26・27日、ジュネーブでOPEC総会が開かれますが、1バーレル20ドルの気運が濃厚のようです。

が、この結論を待って、サミットはどう対処して行くでしょうか。石油の殆んど100%を輸入に待っている我が国にとっては、一般民生方面は元より、電力・産業・交通運輸等、あらゆる方面への影響必至であります。この際、省エネルギー、節エネルギーに一層の拍車をかける必要があります。今は幸にして我が国は食糧が十分であります。80年代にはエネルギー及び食糧危機が迫って来ると心配されていますが、今から、その心配及び対処方が大切と思われま

す。

今年、ソ連の小麦が不作のために、シカゴの麦価が急騰したと報ぜられていますが、我が国の食料・飼料の多くを米国に依存している我が国にとっては、対岸の火災視することはできません。一方ソ連を盟首とする東欧諸国のコモコンもやはり今、会議を開いていますが、同じテーブルに就くことは至難のようです。ただこのために国連があります。これととも、当初の理想と現状とは、大きな隔たりがあります。世界の平和と人類の幸福は残念ながらなお前途遠慮の感、一入です。

支部総会 去る5月25日、名古屋にて中部支部が、5月26日、大阪にて関西支部が、6月9日には高松にて四国支部、同日、北九州にて九州支部が、それぞれ支部総会が開かれました。又6月30日には東京支部及び本部総会が、7月13日には中国支部が、それぞれ支部総会を開かれる予定であります。各支部役員のお骨折り及び会員各位の御協力に對して厚く御礼申し上げます。

また卒業何周年の記念集會が催されてお招きを受けて、皆さんがお元気で活躍の状況を知って大変嬉しく又、同慶に堪えません。が、何と云っても、健康が第一であります。健康には呉々も御注意下さるようお願い申し上げます。

同窓会の歌

卒業生の會合の席上で、齊唱できるとな歌が欲しいものです。京大の字歌は格調が高く、こういう際の齊唱には聊か不向きと思われま

す。校歌()としてよく祇

園小唄が歌われますので、私は別項のような「洛友会(同窓会)の歌」を試作してみました。家人に見せたら、このような明治調の歌は、若い人達には向きませんが、例えど、頗る評判が悪いですが、例えば、甲子園の高校野球の際に歌われる高校の校歌は、大体このような調子のものですから、必ずしも若い人にうけないこともあるまいかと考えて、敢て、ここに発表することに致しました。時あつて、この章句を口吟して頂ければ、望外の仕合せに思います。(最終頁参照)

附記、歌詞だけでは、片手落ちと思ひ、この歌詞投稿後、作曲法も何も知らぬ私ながら急に作曲してみました。六月三十日、東京目黒の八芳園で開催された東京支部及び本部の昭和54年度總會の際、倉野昌夫氏(29年卒)の美声により披露發表され、又同君の指導により唱和して頂いたことは大変結構でした。

クイズ小話日譚

大正15年卒 日本建鉄(株)相談役

石川辰雄

前号の洛友会報に、二十余年前洛友会員の若い人から聞かされたクイズの話を書いて、残念ながら

私はその回答を忘れたので、ご当人か洛友会員のどなたか、その解きを教として下さるまいかと訴え

た。ところがこの会報が私の手許に届いた直後に間髪を入れず、私の宅へて休日に電話でその解答を教えて下さった人が現れた。流石に洛友会は博学の教養人の集りだと、瞠目し敬服した。

その仁は昭和三十七年電気工学科卒の遠藤泰さんと名乗られたので名簿を見たら、昭和電工本社の発電課長で、わざわざ横須賀のお宅から長距離電話をして下さったことがわかった。遠藤さんのご教示は「中央公論社発行の中公新書第四四八号の『詭弁論理学』という本の一三八頁に回答が出てますよ」というものであった。

ところで私の書いたクイズとは「天国と地獄の別れ途に休憩所があつて、そこに可愛い双生児の娘さんの一人がいた。この娘の一人は真正直で決して嘘をいわぬ。ところがもう一人の娘はアマノジャクで嘘しかいわない。この日いた娘はそのどちらかわからない。さてただ一と言の質問で、何と聞いたら無事に天国へ行ける道を教えて貰えるだろうか」というものであった。

私は遠藤さんの電話で早速書店に走り、詭弁論理学という面白そうな本を買って来て、頁を繰るのもどかしく食い入るように読んだものである。そしたら私が二十余年前に聞いたこのクイズと寸分

たがわぬパズルが、この本に出ているではないか。何でもルイス・キャロルという人のパズル集にのつてゐる、古い話だったらしい。

この詭弁論理学という本では、天国と地獄の分れ途に來た亡者は、凶弾で倒れたケネディとなつてゐる。そして真正直な方はチャーチル、天邪鬼の方はヒットラーとなつてゐる。それはどうでもよいとして、肝腎の質問だがそれは「もしあなたは『この右の道が天国へ行く道ですか』と聞かれたら『はい』と答えますか?』と質問

して『はい』と答えられたら、それが天国へ行く道なので安心してそちらへ行けばよい、というのが解きになつてゐる。

これですぐピンと來る方は論理学に詳しい人であろう。しかし私にはもう少し先まで説明がほしいと思つたら、幸この本に私の知りたいことを詳述してくれてあつた。

本当に天国へ行く途は右だったとする。そしたら『この右の道が天国へ行く道ですか』という質問(これをPとする)に対して、チャーチルは勿論「はい」答えよう。しかしヒットラーは嘘つきだから「いいえ」と答えるに違いない。ところが「あなたはPときかれたら『はい』と答えますか」という質問(これをQとする)に對

しては、チャーチルは素直に「はい」と答えようが、ヒットラーは嘘つきだから「いいえ」と答えるのが正直な答えな筈だが、嘘つきヒットラーはここでも嘘をついて「はい」と反対を答えてしまふ。

相手		天国への道質問Pに対する答		質問Qに対する答	
		左	右	左	右
チャーチル	左	はい	はい	○はい	はい
	右	はい	はい	○はい	はい
ヒットラー	左	はい	はい	○はい	はい
	右	はい	はい	○はい	はい

つまり嘘つきに二重の嘘をつかせるように仕向ける、というのがこのパズルのミソなのである。この本は親切に表までつけてくれているので、それも借用しておこう。

エンジニヤらしく考えれば、「プラス」×「プラス」=「プラス」だが「マイナス」×「マイナス」=「プラス」という初等数学とアナログガスをみだ。昔私にこのクイズを教えてくれた洛友会員の、或いはこんなことからヒントを得て正解を出し、米人の老女の宣教師にナイス・ボーイ、ワンダフルといわれたのかも知れない。

但し彼の質問は天国を地獄に置きかえてるので「ノー」という答への反対に行け」というものであつた。

遠藤さんに教わつたあとで、偶然の機会に會つた昭和二十四年卒の松村長延君(三菱電機)から私に、先づPの質問をして更にQの質問をしたらという二段論法の提示があつた。唯一つの質問という

ことを除けば、これは勿論正解である。

詭弁論理学の記事によれば、記号論理学の論理方程式を使えば、計算でこの答え出るそうだ。更にこのパズルを複雑化して、チャーチルとヒットラーのほかにスターリンという「嘘もつくが本当のことともいう」というえたいの知れない人物も登場させて、三人に一言ずつ質問をして正解を求める方法も述べているが、余談になるので割愛する。

最後に私の拙文に對し、大正十年講習所卒の中村秀治さんほか、多数の会員からお電話やお言葉に接したので、洛友会報のプロバゲーション・バリヤーの大きなことに、改めて敬意を表する次第である。

洛友会とプロ野球

阪急ブレーブス取締役社長 岡田 栄
昭和24年卒

昭和二十四年、大学卒業後直ちに阪急電鉄に入社、運輸現業の実習を終えて車両部に配属になってから今日まで、度々仕事が変わつて段々と技術屋らしからぬ仕事をやるようになって來ました。そして最近三年間ほど東京に単身赴任してゐました。

まだ憶えておられる方も多いかと思いますが、昨年十月二十二日後樂園球場で行われた阪急ブレーブス対ヤクルトスワローズの日本シリーズ第七戦(この試合は日本シリーズ最終戦として全国の注目を集めたが、ヤクルト大杉選手の本塁ランをめぐつて一時間二十分抗議が続ぎ、ゲームが中断された)が終つた直後阪急ブレーブスの監督と社長兼代表が辞任しました。その数日後に私は阪急電鉄社長に呼ばれ、球団社長に就任を命ぜられたのです。

技術屋がプロ球団の経営にタッチすることは珍しいと思ひます。洛友会の会員でプロ野球界に直接入られたのは、阪急電鉄の森会長(昭3卒、阪急ブレーブスオーナー)と阪神電鉄の野田会長(昭5卒、阪神タイガース前オーナー)のお二人だけで、お二人とも球団

の親会社の社長や会長として球団オーナーをされているのです。

阪急電鉄は私が入社したときから立派な球場(西宮球場)と球団を持つていたし、私としてもその球団であるブレーブスに對する関心は、一般の野球ファン以上に持つていましたが、球団経営を担当するなどは全く予想もしておりませんでした。球団へ來て半年経過した今日でもわからないことがまだ沢山ありますが、プロ球団はどのような仕組みで活動しているのかご紹介してみたいと思ひます。

実際に野球をプレーするのは監督、コーチ、選手であつて、その限りでは社長も代表も他のフロントと呼ばれるスタッフの人々も出る幕はありません。しかし、プロ野球の運営は監督、コーチ、選手のいわゆるチームだけでは出來ません。球場の運営は別にしても、多くの裏方が必要です。チームの出入退動からビジティング・ゲームのための旅行など全般の世話を担当するマネージャーが居ります。また選手のコンディション維持や、怪我に對しては資格を持ったトレーナーが當り、ゲームの前や

ゲームのない日の練習のためのバツティングピッチャー、キャッチャー、そして相手チーム、味方チームの戦力を記録し、分析する（今日ではVTR使用が一般的です）スコアラー等。チームに密着してそれを助ける多くの技能者達が必要です。

一方ではチームの戦力を維持発展させていくためには有望な新人を発掘してドラフトすることや、他球団の選手と交換するトレードが必要で、このためには、他球団の選手の能力や、社会人選手、学生選手、はまた外人選手まであらかじめ調査しなければなりません。これらの仕事は、スカウトや調査部員が担当しています。これ以外にも、営業的な活動や総務的な仕事も欠かすことができません。これらのフロントと称される人の数は各球団とも数十名になります。

選手（六十名）、コーチ（十名）、監督（一名）は株式会社である球団の従業員ではありません。彼等は各自独立の自営業者となっております。球団とは定められた期間毎に契約し、球団のために働くというシステムとなっています。

球団は契約による労務提供者の集りであるチームと、社員から構成されているフロントとの二つのグループから出来ていて、社長は

チームのグラウンドでのゲームや練習の具体的用兵に関するものを除き、一切の業務に責任を持つこととなります。プロ球界には球団代表という制度があつて球界内では球団を代表することになっていきます。（代表は社長である必要はありません）

近来、野球はわが国で大層ポピュラーなスポーツとなり、子供も婦人も野球がわかります。私自身、とりたてて野球をやつた経験はないものの、一応のルールはわかるし、ヒットやホームランが出れば勝ちにつながり、エラーが出れば反対に負けにつながることは理解できます。球団代表はオープン戦から公式戦、日本シリーズに至るまでチームと行動を共にします。現在ではフロントのそれぞれの担当者が、それぞれの仕事を責任を持って行うのですから、社長の仕事にとり立ててあるわけではありません。野球をやつた経験のない社長には、スコアラーをつけることもできないし、実戦上のアドバイスを与えることが出来るわけでもありません（出来てもしてはいけません）。ただ全般の責任と、社長が常にチームと同行していることが、チームに良い影響を与えることになるだろうという期待があり、事実そうだろうと思えます。逆にシーズン・オフにはプロ

ントの仕事が忙しくなります。私は今後、自分のチームのゲームの進行状況やその結果に、その都度満ち足りた気持ちになったり、胃や心臓を悪くしたりしながら、今年のシーズンを通すことになるでしょう。そして一三〇ゲーム終つた時点でどういふ結果になるか、プレーオフか、完全優勝か、または無念の思いにかられているか、それはその時になってみないとわかりません。

しかし唯一つ言えることは、わが阪急ブレーブスは沿線の方々、そして全国の青少年に健全な娯楽

研究室紹介

情報工学科 計算機システム講座

昭和25年卒 萩原 宏

昭和45年に情報工学科が創設され、その三番目の講座として翌46年にこの講座が開設された。直ちに、当時数理工学科にあつた計算機工学講座を担当していた萩原が渡辺勝正助教、向山浩靖助手らと共にこの講座に移つてスタートした。その後、昭和48年博士課程（電気工学専攻）を終えた富田真治君を助手として迎え、スタッフの充実をはかった。昨年渡辺助教が福井大学の情報工学科に教授

を提供するという大目標のもとに、清く、正しく、遅しく、プロフェッショナルな、わけてもわがブレーブスでなければ見られないような高度な野球を皆様に提供していただけるよう、毎日精進しております。

電気技術者である一人の洛友会会員が、どうした運命か風の吹き廻しか、プロ野球団の責任者となりましたが、名誉ある洛友会の名を汚さないよう、せい一杯の努力をいたします。今後一層のご声援をお願いいたします。

として転出、あとをうけて富田助手が助教に昇任し、今年四月より情報工学科の第一期生の柴山潔君が助手となり、全員張り切つて教育研究に精を出している。

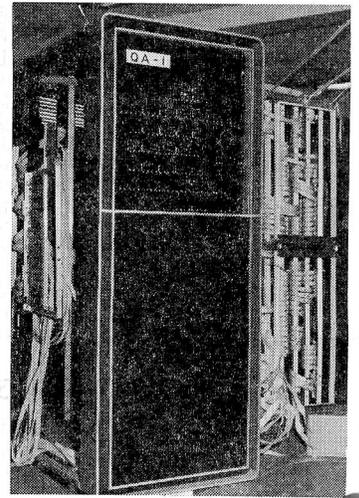
情報工学は電子計算機の進歩に伴つて急速に発展した新しい学問分野であり、この講座はその中核をなす計算機システムに関する研究教育を担当しているわけです。

電子計算機は誕生してまだ三十年余しか経っていないが、その間に急激な発達を遂げ、現在もお進歩を続けている。特に半導体技術の進歩により、LSI（大規模集積回路）が発達し、これが活用されるようになると共に、更に一段の発展を遂げてきている。また、いわゆるマイクロコンピュータから超大型コンピュータに至るシステムの規模および応用分野における幅の広さは、丁度モーターの小型のものから大型のものに至る幅の広さに匹敵する、あるいはそれ以上のものがあるのではないかと思われる。

しかも、計算機システムは御承知のように、ハードウェアとソフトウェアが一体となつてはじめてシステムとして成り立つものであるが、情報工学科には計算機ソフトウェア講座があるので、当研究室では現在主として計算機システムの構成に関する種々の問題を研究している。以下その中の主要な二三の課題について紹介しよう。

一、マイクロプログラミング方式に関する研究

マイクロプログラミング方式は計算機の制御方式として現在広く用いられているが、わが国では、昭和36年に筆者が設計試作した計算機KTパイロットの制御にはじめて用いられたのであり、その後もし引き続きこの方式の調査研究を行っている。特に、昭和48年より



新しい実験用のマイクロプロセッサ制御計算機QA-1の設計試作を行い、昭和51年暮には稼働を始めた。その外観は写真に見られる通りで、基本設計から実装配線に至るまですべて研究室員の手で行われたのであり、見掛けは良くないが安定に動作している。この計算機は演算回路を四組もち、これらをマイクロプログラムによって互に独立に制御することができるようになっており、四つの演算処理を同時に並行して実行することができるものである。その他にも数々の特徴をもつ計算機であり、後に述べる研究に連日連夜活用している。

この他、マイクロプログラムの自動作成に関する研究なども行い、具体的な成果をあげている。

二、並列処理に関する研究
計算機による処理の高速化をはかるための方法の一つとして、並列処理がある。素子の改良による

計算機の高速化が限界に近づいてくると共に並列処理が重要になってくるが、当研究室では前述のQA-1における並列処理の他、種々の方式について調査研究を進め、新しい計算機システムの開発の手掛りを得ようとして努力している。

三、高級言語計算機の研究

現在、多くの計算機のプログラムはFORTRANやPL/1のような高級プログラミング言語で書かれているが、ふつうの計算機では、この高級言語のプログラムをそのままの形で直接実行することはできないので、一旦その計算機の機械語のプログラムに翻訳した上で、そのプログラムを実行するコンパイラ方式、あるいは、機械語のプログラムによって解釈しながら実行するインタプリタ方式をとっている。これらの方式は必ずしも能率が良くなく、特に後者の方式は著しく処理効率が低下する。そこで高級言語で書かれたプログラムをそのまま、あるいは若干の処理をして直ちに実行する方式の計算機が考えられる。当研究

室ではこの方式をマイクロプログラムで実現する研究を進め、APPLE、BASIC、PASCAL、LISPなど種々の高級言語の処理系の開発を進めている。

その他、前述のQA-1を利用して、図形処理や信号処理などの実験的研究、並列処理システムやデータフロー形計算機など新しい計算機システムに関する研究も進めている。

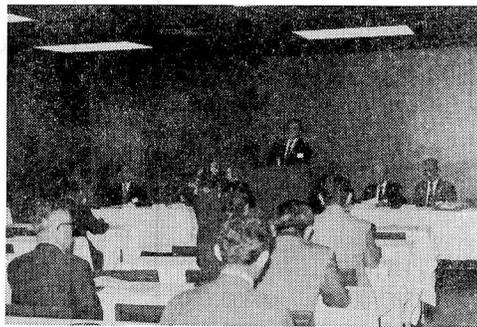
昭和54年度洛友会 関西支部総会報告

去る5月26日大阪関電会館に於いて、昭和54年度洛友会関西支部総会が開催された。

総会は、おり悪く降り出した激しい雷雨の中を御出席いただいた松田、近藤および木村先生をはじめとす40名の出席者を得、17時から開かれた。

まず昭和53年度事業報告および会計報告が承認され、阪本勇支部長から挨拶があり、そのあと、大森武司新支部長が選出された。続いて新支部長の挨拶があり、昭和

54年度(事業計画と予算が承認された。引続き近藤先生から、電気教室の近況報告がおこなわれ、立食パーティにうつり、なごやかなうちに総会は19時過ぎに閉会した。



なお、新役員は、次のとおりである。

- 支部長 大森武司 昭和11年卒
- 日新電機機働会長
- 副支部長 佐々木正 昭和13年卒
- シャープ機働専務取締役
- 同 前田藤治 昭和16年卒
- 近畿電気工事機働専務取締役

(留任)

- 総務幹事 八田昌和 昭和31年卒
- 日新電機機働品質管理部長
- 会計幹事 西台 惇 昭和32年卒
- 日新電機機働高電圧開発部長

卒業25周年クラス会

(昭和29年卒業)

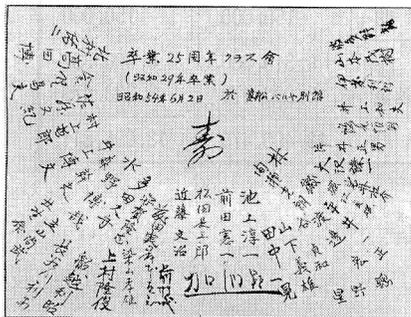
緑も涼しい去る六月二日、卒業以来四半世紀を迎えた昭和二十九年卒業の同期の友が、洛北は貴船で記念クラス会を開催した。

恩師、松田長三郎先生はじめ、前田憲一先生、近藤文治先生、池上淳一先生らをお迎えし、貴船川の清流に流したつた棧敷で、かじかの声を聞きながらの情趣豊かな宴席となった。

出席は、卒業生七二名のうち三七名、多忙な年代にしては、よく集まれたものである。

懐かしい顔ぶれの中には卒業後はじめての再会もあって、話はずみ、時のたつのも忘れる思いであったが、寮歌、祇園小唄の合唱で、和やかに開きを迎えた。

(井上和夫記)





6月30日(土)に、東京目黒八芳園に於て東京支部総会と共催で開催された。出席者約一三〇名の盛況で支部総会に続いて近藤幹事の司会にて、松田会長の挨拶後昭和53年度事業並びに決算報告、昭和54年度事業計画並びに予算の説明があった。

尚、田中哲郎副会長が四月より諮問電波工業高等専門学校校長に御赴任になったので教室より最年長教授の上之園教授が後任として新らしく副会長に就任することになった。総会終了後懇親会に移り各々旧交を暖めた。



昭和54年度

洛友会総会

昭和53年度収支決算

昭和53年4月1日から
昭和54年3月31日まで

収入の部 (単位円)

科目	53年度決算	予算額
会費	5,315,200	5,500,000
ノ(講習所)	561,200	600,000
預金利子	179,402	270,000
広告掲載料	1,839,000	1,800,000
雑収入	90,000	75,000
収入計	7,984,802	8,245,000
前年度繰越金	5,112,009	4,812,183
合計	13,096,811	13,057,183

支出の部

科目	53年度決算	予算額
名簿編集費	40,500	10,000
印刷費	4,150,000	4,000,000
送費	778,482	800,000
会報編集費	5,400	5,000
印刷費	458,500	600,000
送費	872,350	900,000
備品費	162,950	20,000
通信費	74,470	80,000
会合費	125,140	120,000
総会費	345,750	330,000
集金費	117,430	130,000
総掛費	380,060	300,000
旅費	345,300	600,000
懇話会補助	150,000	150,000
支出計	8,006,332	8,045,000
次年度繰越金	5,090,479	5,012,183
合計	13,096,811	13,057,183

昭和54年度収支予算

昭和54年4月1日から
昭和55年3月31日まで

収入の部 (単位円)

科目	予算額	53年度決算
会費	5,580,000	5,315,200
ノ(講習所)	600,000	561,200
預金利子	250,000	179,402
広告掲載料	1,800,000	1,839,000
雑収入	80,000	90,000
収入計	8,310,000	7,984,802
前年度繰越金	5,090,479	5,112,009
合計	13,400,479	13,096,811

支出の部

科目	予算額	53年度決算
名簿編集費	30,000	40,500
ノ印刷費	4,200,000	4,150,000
ノ送費	800,000	778,482
会報編集費	10,000	5,400
ノ印刷費	600,000	458,500
ノ送費	900,000	872,350
備品費	20,000	162,950
通信費	80,000	74,470
会合費	150,000	125,140
総会費	300,000	345,750
集金費	120,000	117,430
総掛費	400,000	380,060
旅費	550,000	345,300
懇話会補助	150,000	150,000
支出計	8,310,000	8,006,332
次年度繰越金	5,090,479	5,090,479
合計	13,400,479	13,096,811

預金および現金 (昭和54年3月31日現在)

信託預金	1,000,000	郵便振替	631
定期預金	2,255,814	現金	46,901
当座預金	241	合計	5,090,479
普通預金	1,786,892		

昭和34年卒

20周年同期会

昭和三十四年に卒業した我々電気、電子工学科七十七名の卒業二十周年記念同期会は、五月二十六日〜二十七日にかけて南禅寺近くの八千代旅館に全員泊りがけで、遠くは秋田・仙台からの友も含めて総勢四十四名、三人の恩師の先生方、前田憲一先生、大谷泰之先生、池上淳一先生をお迎えして盛大に催された。

学業生活、すなわち人生の起の時代を終えて卒業以来、承の二十年間を過ごし、皆元気で各方面の第一線で活躍しているのは心強い限りである。こゝに人生の丁度半ばに達し、いよ／＼これから尚一層の開花の時、転に転じようとする一番大きな人生の節である。

二十年のタイムトンネルはあつたという間にバツクして、お互いに全然変らないなあといながら（実際に第三者からみれば中年のおっさんなのだが）、話は汲めども尽きず、冥果てたあとも二時頃まで話に花が咲いた部屋が多かつたようである。

翌朝は南禅寺を散策して記念写真を撮り、それから三々五々、久しぶりに哲学の道を歩いたりして散会した。出席者は、青木英人、

伊藤健、伊藤俊一、磯田賢一、宇田裕重、上田皖亮、岡村宗治、鎌田幸成、川本幸雄、河合八朗、北村元彦、高畑国光、中野雅史、中村泰明、西尾英之助、西島誠一、西村勝、橋本勉、橋本亨、平井正好、松田禎夫、三宅和雄、水田明秀、村上敏、森田宏、森安正司、井上幸美、伊原博司、大沢弘治、大家寛、奥川俊二、河崎達夫、進士昌明、長尾真、信国弘毅、橋本清、東本武久、深尾正之、吹抜敬彦、畚野信義、藤本寛、三輪修山本重彦、吉田克彦の各氏。

(奥川記)



洛友会東北支部 第14回総会報告

昭和54年6月

第14回洛友会東北支部総会は、6月16日仙台市内の東北電気会館において開催された。

本部から上之園親佐先生をお迎えし、支部からは二村支部長をはじめ、11名のご出席があった。

支部長、上之園先生のご挨拶につづいて、会計報告が承認され、議事に滞りなく終了した。

恒例により、上之園先生から「発電機の脱調とその予測による系統安定度の制御」について記念講演があり、脱調の予測を発電機から実測により行なうことが出来るという画期的方法をお聞きし、そのお話の中で「マシンは知っているが、それを伝えるすべが無い」というお言葉には特に深い感銘を受けた。

引続き懇親会に入り、出席者から、それぞれ自己紹介を戴き、エネルギー問題など広い視野に立った。豊富な話題が統発し、時間のたつのも忘れて楽しい一時を過ごし、9時近くに散会した。

以上



事務局よりの御願い

○会費納入の件

54年度会費未納の方は成るべく早い目に御送金下さる様御願ひします。

尚昨年度(53年度)以前の会費未納分は、御請求致しませんので、53年度分からの会費を御支払下さる様御願ひします。

○会員名簿の正確を期するため

勤務先別に、御手紙を差上げ御返事を頂いて居りますが、住所変更のある場合は、その都度会員各位から直接事務局宛御通知下さる様、お願い申し上げます。



計報

講大14年	大雲伊三郎	53・11・4
講昭2年	岸 馴一	
講昭4年	脇 太作	53・8・6
講昭13年	河村 和一	
講昭15年	蜂谷 二郎	54・3・20
大7年	阿部 清	54・5・24
大13年	永井徐二郎	54・6・4
大14年	竹安 保	54・4・13
昭9年	旭 晴晃	54・3・31
昭14年	高崎 勲	54・6・19
昭23年	矢田 幸輔	53・11・11
昭46年	柴田 至剛	54・5・4

以上の方々のご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

洛友会(同窓会)の歌 作詞 松田長三郎

楽譜 (Musical score) with lyrics:

ふ る - き み や こ - に い く - と セ - ぎ
 と も - に ま な び - し ど お - そ お - の -
 き お - な っ か - し き こ の - っ ど - い
 せ い し ゃ ん の ひ は -- よ み - が ー る

洛友会(同窓会)の歌 松田長三郎 作詞作曲

- (1) 古き都に幾く歳をととに学びし同窓の
 今日なつかしきこの集い 青春の日はよみがえる
- (2) 心はずみて学び舎の門をくぐりし若き日の
 夢多かりし明暮は 希望に燃ゆる日となり
- (3) 世に出でしより年と経ぬ 思いはめぐるかりふしに
 まふたに浮ぶ師や友の 聲も聲もなつかしや
- (4) 名残はつきじさらば友 進み行く世は新らしま
 技術を樹ぶくまると共に また會う日まで輝く生をえ



東京同窓会誌
 松田長三郎

東京同窓会誌

編者
 編集